最後の日中緑化交流基金助成事業の終結に向けて

(一社)国際善隣協会
顧問　八島継男

去る 7 月 22 日から、26 日まで、当協会は会長をはじめとする 13 人の旅行団を組み、現在、当協会が基金の助成を受けて実施している甘粛省永靖県劉家峡ダム区日中友好林造林及び康楽県日中友好生態造林事業の 2 ヶ所のサイトの視察と関係者との交流会を行った。概ね順調とはいえ、早朝の羽田発北京行き CA122 便が 2 時間遅れたため、北京に着いたときは 12 時 30 分の蘭州行の発った後であった。仕方なく当日中に現地に着くためには 6 時 30 分北京発の東方航空まで待たなくてはならなかった。蘭州着は夜の 9 時 30 分、そこから永靖県城のホテルに着いたのは真夜中の 0 時過ぎであった。

永靖県植林地記念碑での合同写真

そのため当日午後に予定したプログラムは全てキャンセルとなり、準備を進めていた中国側には大変失礼することになった。

康楽県植林地記念碑と当協会一行

翌日は2及び3年目の植林地は割愛し、1年目の植林地の記念碑を見て、ダム湖を快速モーターボートで炳霊寺（炳霊の意味は阿弥陀仏のチベット語）へ。北魏以降の仏教遺跡を見学し、80年代に私が行った頃は壁面の彫刻を巡る回廊は木製であったが、今回はコンクリ―ト製の立派な回廊に替わっていた。満水期には回廊の床近くまで水位が上がるという。北魏以降の長い漢仏教とチベット仏教の戦いの末、チベット仏教が勝利した結果という。その後、バスで康楽県城へ。そこで一泊し、翌日は第２期（通算４及び５年目）の康楽県植林地へ。林地の中に立派な管理棟が建てられ、そこで関係者と交流し、スイカ、ウリ等の振る舞いを受けた。林地を視察し、蘭州に戻った。ホテルで甘粛省林業庁の幹部と面会した。翌日は蘭州の市内見物、他の地方都市と変わらず高層建築が林立する近代都市に生まれ変わっていた。

蘭州にはさらに新区が整備されつつある。天候に恵まれたが、流石に蘭州は暑いが良い旅であった。帰りは北京で3泊し、日本大使館、文化部、科学技術部中国科学技術交流センター、中国生物環保科技産業連盟、中国国際放送局等を訪問した。国家林業局はその時期関係者が訪日中ということで割愛した。北京が暫くぶりという人もおり、発展する首都に目を見張った。

一行の一人が、北京で携帯電話を蘭州のホテルに忘れてきたことに気づき、電話で問い合わせたところ、見つかったので北京まで送ってもらうこととした。携帯電話は内蔵する電地の関係で航空機には載せられず、車で届けてもらうこととしたが、とても2日後の帰国までには間に合わないと思ったので、北京の旅行社宛にした。ところが翌々日の午後すでに北京の旅行社に届けられ、夕食の席に本人の手に戻ったのには一同、現在の中国内の物流の速さには感嘆した。

ともあれ、いろいろありましたが、事業の最後にふさわしい、多くの意味で一行の記憶に残る旅であった。ちなみに永靖県の事業は平成29年9月で3年間の事業が完了し、平成30年の9月には康楽県の事業も6年間の植栽を終了する。思えば、本当に小渕基金の助成事業に最初から参加し、18年の長きに亘り、本当に良い事業に参加できましたこと、基金事務局の皆様のご指導とご支援には厚く感謝申し上げます。